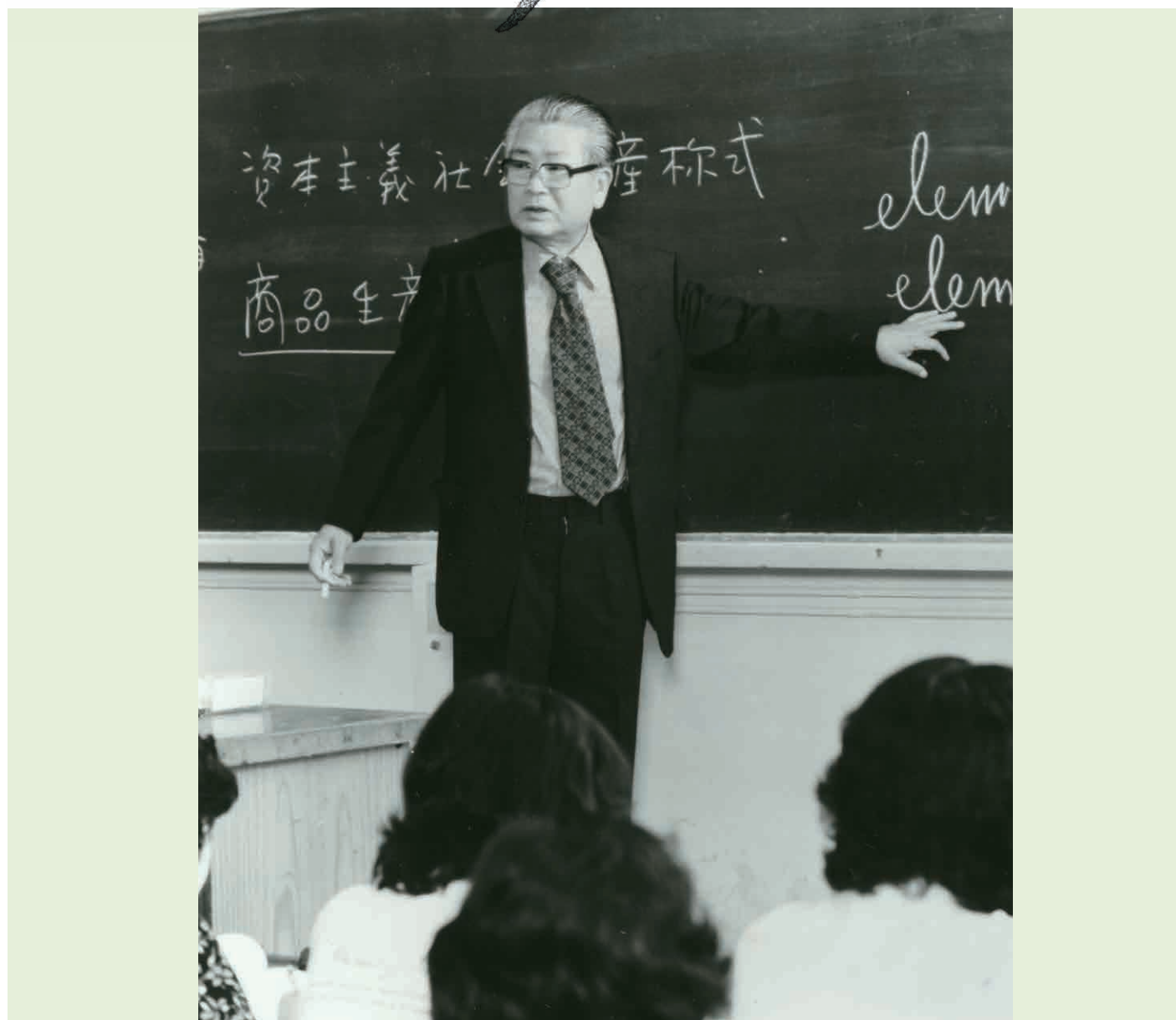


パンタライ
πánta pēi Chiba University of Commerce
Archives Newsletter
R. Endo



番場 嘉一郎「学長ゼミ」

千葉商科大学第4代学長で会計学を専門とした番場嘉一郎によるゼミ風景。番場学長のもと千葉商科大学は大学院を開設(1977年4月商学研究科商学専攻修士課程、1979年4月経済学研究科経済学専攻修士課程)、さらなる飛躍を果たした時代である。

番場は1909年生まれ、東京商科大学(現在の一橋大学)を卒業後、1934年よりダイヤモンド社記者として活躍する一方、1941年5月に巣鴨高等商業学校講師、1942年4月に同校教授

となったが、1944年7月より横浜市立経済専門学校(現在の横浜市立大学)へと移籍するにあたり巣鴨高商を退職した。戦後は一橋大学教授、青山学院大学教授などを歴任、1962年に商学博士(一橋大学)となった。1975年4月に千葉商科大学学長として着任、以降1987年3月まで千葉短期大学長、学校法人千葉学園理事・評議員、大学院研究科委員会委員長等を兼務した。

創刊ご挨拶

「歴史とは現在と過去の間の対話である」。偉大なイギリスの歴史家、E.H.カーは「歴史とは何か：What is History？」の中でこう述べています。

今回、本学創立100周年記念事業の一環として、100年の歩みを史実に照らして忠実に記述することの意義はまことに大きいと考えます。カー博士が指摘されているように、「過去の光に照らして現在の理解を促進する」ことができるからです。

遠藤隆吉博士が本学を創立した当時、アメリカを中心に世界は「狂乱の20年代」と言われ、儲かればよい、という利己主義が蔓延していました。商業道德が乱れていたのはいうまでもありません。治道家の養成を教育の根幹に置いた遠藤が私財を投じて本学を創設したのも、こうした時代の要請にこたえようとしたからです。

世界は1920年代末、バブルがはじけるように突然、終わりを告げました。やがて“民主的選挙”を経て独裁者が誕生し、第2次大戦の引き金を引きしました。戦火に見舞われた本学は、教学の拠

点を巢鴨から市川市に移して戦後復興に取り組み、高度成長時代に業容を拡大して今日に及んでいます。

いま、資本主義の行き詰まりが言われ、貧富の格差拡大からポピュリズムが政治を支配する機運が高まっているように見えます。時代はまた大きく変わろうとしています。現在を歴史の目を通して、歪みなく自身を位置付ける重要性はこれまでになく高まっているのです。

カー博士は、「なぜ今がこうなのか」を理解すると同時に、「どこへ」と問いかけるのが、歴史を知る意義だと説いています。わが千葉学園は、昨年度から2028年の創立100年を節目に据えた第3期中期経営計画（2024—2029年度）に取り組んでいます。「社会が必要とする学園」を目標に、高大一貫教育による伝統ある商業・会計教育、実践的なSDGs教育など、他では学べないブルーオーシャン教育の推進を目標に置きました。後代に歴史がどう評価するのか、見たい気がします。

01

Greetings

歴史に学ぶ
意味とは
理事長 内田 茂男



創刊によせて

人生100年時代と言われ、100歳を迎える長寿の方々も増えているが、実は歴史をみれば、繁栄を100年続けることはそう簡単ではない。

例えば19世紀の国際秩序を支配した英国も、その圧倒的な工業力と資本力、軍事力でパックス・ブリタニカを実現していたのは、産業革命で世界の工場となった1850年頃から1914年第一次世界大戦勃発あたりまで。レーニンのロシア革命から誕生したソ連も1922年の建国から70年もたずに1991年に崩壊している。元寇で鎌倉時代の我が国を震撼させた元も、中国大陸を支配していたのは1271年から1368年までで100年に届かなかった。

歴史を創ると同時に、変化する時代に柔軟に対応できなければ、100年の長きを全うするのは難しいということだろう。まもなく100周年を迎える本学も、昭和3年(1928年)の建学から、時代を見据えて幾たびかの改革が続けてきた。商経学部単体から政策情報学部、サービス創造学部、人間社会学部、国際教養学部と折々の社会情勢を半歩

先取りしながら社会科学系の総合大学としての形を整え、世の中に必要とされる人材の育成につとめてきた。

そして、今年度はもうひとひねり学部学科の再編を行い、その後の100年も社会から信頼され、必要とされる大学であり続ける決意を新たにしている。

そんな本学の歩みをまとめる記念誌の編集が始まる。建学の精神である治道家の育成は、世を超え人を超え貫かれてきた本学の中心軸だが、それが、時代の波の中でどのような「形」をみせ、どのような変化を遂げてきたのか、詳らかにすることは即ち、この国の歴史そのものを語ることでもある。

今、大いなる歴史の中で、私達はどのような位置づけのところにいるのか。期待を込めて覗いていただけるよう、記念誌編集の進捗状況をお知らせする『記念誌編纂だより』を創刊することになった。100周年までカウントダウンが始まろうとしている今、この便りを手に取って本学の鼓動を聞いていただければ幸甚である。

02

Greetings

100年の重み
学長 宮崎 緑



03

Greetings

知識と経験の結合が大切

同窓会長 高橋 伸治

いま私学に最も望まれる大切なことは建学の精神や個性や伝統であり、それを学内外に表明するという使命であります。また、それらを根拠付ける学術的な歴史資料を収集・保存・公開するという役割です。

2023年度に遠藤隆吉研究所が設立され、千葉商科大学の理念が明確化されるようになった意義は非常に大きいと思っています。創立以来の資料収集と整理、創立100周年に向けての教育活動などの基礎作業が進められており、誠に喜ばしいことです。

さらに大学創立100周年記念事業実行委員会のもとに設置された「記念誌分科会」の皆様のおかげで創立以来の本学園の現実が明らかになり、これからの千葉商科大学の方向性が導き出されることは同窓会にとっても大きな喜びであります。そして、4年後に創立100周年を迎える千葉商科大学に対しても、過去を直視することが大切です。限られた時間の中で成果を生み出せるかどうかはすべてです。およそ伝統ある組織というものはその歴史なくては語れませんし、その健全な発展も正しい歴史認識があつてのことです。時代

が昭和・平成・令和と大きく変わってきたなかで教育環境も大改革を繰り返してきました。その間に実務に携われた教職員のご努力に対し、深甚なる敬意を表する次第であります。

無理してでも働くという日本型労働が今では、「無理しないので有意義に働く」という労働環境に変化してしまいました。その中では、低賃金で働く労働者を探し求めるシステムは崩壊しています。また、少子化時代に突入した日本の人口は1億人を割ることは確実と言われています。社会環境が変わった今、私たち同窓会も、ここでもう一度、「同窓会はなぜ存在しているのか」を真剣に考える時だと思っています。「記念誌編纂だより」を発行することにより、全国9万人の卒業生の皆様と一緒にその

時その場の進捗状況をつぶさに知ることができることに大きな意義を感じています。

本学園をめぐる環境が厳しいなか、今一度原点に立ち返り、足元を見つめ直すことは本学園の新たな飛躍にとって必要不可欠であります。社会科学の総合大学である千葉商科大学も新たな改革の時を迎えています。時代にマッチした大学、社会が必要とする大学に向けて、大きな一歩を踏み出そうとしています。次代を担う若い世代の皆様の手もどんどん取り入れて今以上に盛大に歩み続けることを祈念しております。記念誌編纂だよりの発刊、誠に改めてとうございます。

100th
1928-2028
ANNIVERSARY

千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会
記念誌分科会 メンバー

責任者：磯山友幸

副責任者：朽木 量

構成員：金子聡訓 枡岡大輔 浅沼薫奈

東海林真巳 江原丈智

オブザーバー：伊藤雅敏

幹事：総務課

本学創立100周年記念事業の基本方針である「100年の歴史を振り返り、『知徳豊かな持続可能社会の実現』を目指し、関わる人すべてが一体となって未来へ向かう。」の下、100周年記念誌の発刊に向けた企画および立案・実行を行うため記念誌分科会が設置されました。





資料紹介 浅沼 薫奈 千葉商科大学サイエンスアカデミー特別客員教授・遠藤隆吉研究所客員研究員

絵葉書「顧問後藤子爵 校長遠藤博士 巢鴨中学校研究室」

「巢鴨中学校研究室」と題し、校舎正面入口を写した絵葉書がある。左上には壮年の遠藤隆吉、右上には多くの勲章を胸に付けた後藤新平の肖像写真がそれぞれ配されている。下には「顧問後藤子爵 校長遠藤博士 巢鴨中学校研究室」の文字が印字されており、この絵葉書が刷られたのは巢鴨中学校創設の頃と推察される。巢鴨中学校が開校したのは1922（大正11）年9月のことであり、同校校舎建設に協力した後藤新平は巢園学舎顧問に着任した。

卒業」の記載が確認できるのみで、東京高等師範学校講師の履歴についても書かれていない。このことは同書が遠藤の半生とともに「巢園学舎」のあゆみを描くことを趣旨としていることも一因としてあるのかもしれないが、いずれにしても遠藤は生涯にわたって官学教育を批判的に見ていたようである。

さて、遠藤は社会学に関する論文を東京帝国大学文科大学へ提出し、1907（明治40）年11月6日に文学博士の学位を授与されている。帝国大学における文学博士の審査は特に厳しく、特に30代前半という若年博士は稀有な存在であった。そのため、この間の遠藤はその生涯のなかでも極めてストイックな学究的生活を送っていたと想像される。博士論文によって自身の研究を形作ると、社会学研究所や巢園学舎の設立などに着手し、以降は「治道家」という独自の道を進んでいくこととなるのである。

遠藤隆吉と巢園学舎の創設

後に巢園学舎を創設し巢鴨学園を発展させた遠藤隆吉（1874-1946）が巢鴨に居を構えたのは、1905（明治38）年6月のことであった。日本鉄道によって大塚駅や巢鴨駅が開通し国有化することになる頃である。

遠藤は1899（明治32）年7月に東京帝国大学を卒業、1900（明治33）年より東京高等師範学校（現在の筑波大学）講師となったが、官学の教育にはついぞ馴染めず、1916（大正5）年まで同校で社会学を講じたものの、教授昇格を断り辞すこととした。早稲田大学や東洋大学での教育も経て、教育とは私学こそが担うべきとの考えを抱いた遠藤は、徹底した実学主義のもと、私財を投じて1910（明治43）年に私塾「巢園学舎」を設立、自らが理想とする教育を実践することにしたのである。

なお、後年になって遠藤は『巢園自伝』（1938年10月、巢園学舎出版部）を著しているが、同書のなかで故郷の前橋にいた頃の話は比較的詳しく書いているものの、「東京遊学の頃」と題し進学時の話に触れているにもかかわらず第一高等学校や東京帝国大学など母校については言及しておらず、文中には東京帝大や東京高等師範学校という校名も出てこない。同書の巻頭口絵の下にある数行の遠藤略歴のなかに「東京帝国大学文科大学哲学科

巢園学舎出版部

遠藤は私塾である巢園学舎において、「硬教育による英才教育と人間研究の実践」を目指していた。「硬教育」とは努力主義とも解され、主として文武の鍛錬、人格の陶冶を実践するための方法論が研究された。巢園学舎設立より2年前の1908（明治41）年には「日本社会学研究所」を私的に設置しており、同研究所からは遠藤独自の「硬教育」に関する理論や発音統計論など多様な内容を含む『論集』を発行したが、継続が難しくすぐに廃刊となった。研究事業を精力的に進めるにあたって、独自の出版部と印刷所の開設は必須であると考えた遠藤は、その目的を達するために1910（明治43）年に巢園学舎を設立、あらためて社会学研究所を置き、同時に巢園学舎出版部および印刷所を設置したのであった。

その後、巢園学舎出版部は1914（大正3）年より『国粹全書』刊行を開始、全24巻からなる全集を完成させた。また、1917（大正6）年には易学研究所が新たに設置された。二つの研究所からは講義録のほか、社会および国体に関する研究が次々と発表されていくこととなった。遠藤は多数の著作を残しているが、巢園学舎出版部から出版されたものも少なくない。

遠藤隆吉と後藤新平

遠藤が後藤新平（1857-1929）と親しくなったのは、巢園学舎を設立してしばらく経った「大正の始め」の頃であり、「後藤伯は其の頃男爵で満鉄総裁をして麻布狹穴の宿舎に居られた」という（『巢園自伝』74ページ）。満鉄初代総裁として知られる後藤が子爵となったのは1922（大正11）年9月、1928（昭和3）年11月には伯爵に陞爵した。身分の差もあるうえ、遠藤は1874（明治7）年生まれ、後藤は1857（安政4）年の生まれであるから、親子に近い年齢差があったが、後藤は常に遠藤を「先生」と称し、遠藤の「老子説」を聴講することを特に好んだ。

当時、学校建設を志していた遠藤にとって最も悩ましかったのは、校舎建設費用の捻出であった。遠藤が巢鴨に居を構えた当時の「巢鴨村」は田畑が広がるのどかな場所で、土地の価格は比較的安価であった。ところが10年ほど経た頃には巢鴨の土地価格は数倍に高騰したため、狭小ながらいち早く土地を入手していたことは幸運であり、先見の明があったとも言える。もともと巢鴨は民家も少なく交通も不便で学校建設地として適当とは言い難い土地だったが、周囲の発展とともに学校建設の機運は高まったのであった。

遠藤は文部省へ中学校（旧制）設立申請を行う一方、1921（大正10）年より周囲の協力のもと校舎建設に着手した。工事費用の請求に応じ遠藤は当初こそ私財を投じ支払っていたものの、度重なる請求に個人負担では学校建設は限界であることを悟り、途中から後藤に支援を求めることとした。ただし、後藤もすぐに了承したわけではなかった。再三にわたって学校建設構想についての話を聞くうち、遠藤の建てようとする中学校が後藤の考える中等教育振興の理想に近いと判断し、顧問に就任し協力することを決めたのである。後藤が経済界に働きかけたことで根津嘉一郎（東武鉄道創業者）など複数の財界人たちからの寄附金が集まり、巢鴨中学校は建設されたのであった。

巢園学舎から財団法人巢鴨学園へ

遠藤が巢園学舎の事業拡大に踏み切り公的機関として本格的に学校運営を開始したのは、1922（大正11）年



1933（昭和8）年当時の豊島区地図

の巢鴨中学校設立以降のことであった。翌1923年には巢鴨商業学校が設置され、さらに1928（昭和3）年より財団法人巢鴨学園を立ちあげ、巢鴨高等商業学校が開設された。

『巢鴨学園 巢鴨中学校・商業学校一覧』によれば、「巢鴨学園といふ名は二様の意味に用ゐられて居る」とし、一つは広義の意味で「一切の事業を包含したるもの」であり、もう一つは「中学校を始め高等商業学校や商業学校を包含する財団法人である」とされる。「財団法人は学校経営上の団体である。兎に角学園は広いものであつて社会に対し、国家に対して思想上教育上の使命を有つて居るのである」と述べている。それまでの事業を包括したうえで、学校事業を新たに展開し発展させることを期していたのである。

「顧問後藤子爵 校長遠藤博士 巢鴨中学校研究室」の絵葉書は、後藤新平の協力や尽力に対する感謝の気持ちを表しているとともに、敢えて「研究室」の名称を掲げたところに遠藤の気概が垣間見える。実際、建設された校舎には当時としては珍しく教室のほかに各階に研究室が配されていた。遠藤にとって巢鴨中学、巢鴨商業学校、巢鴨高等商業学校からなる巢鴨学園は、自身の生涯をかけた研究の粋を集めた存在であった。「硬教育」の実践の場であるとともに、独自の研究による有用な人材育成を目指した。絵葉書のなかの遠藤の視線は先を見据えており、信念を貫く強い意志を感じさせる。

「津田沼境域記」碑と修練道場「生々示字」

遠藤隆吉研究所は、2028年の千葉商科大学(旧：巣鴨高等商業学校)の創立 100周年に向けて、本学の建学者遠藤隆吉博士の事績、著作、遺蹟の研究ならびに顕彰を目的とし 2023年に設立されました。また、遠藤隆吉博士以外の学園関係者の研究・顕彰、学校法人千葉学園・千葉商科大学および付属高校の学園史の研究も行っています。

遠藤隆吉先生は社会学・哲学・東洋思想史・教育学・政治学・心理学など多岐にわたる分野の著作を著すとともに、「人文東洋主義」「生々主義」といった理想のもと、その哲学的教育的信念を現実社会で実践していった偉大な研究者であり教育者でした。一方、その著作の中には、旧仮名遣いや漢文体のもの、墨蹟として残されたものの未翻刻のものなども多く、現代の私たちがその思想に気軽に触れにくいものになってしまっています。また、そのことが原因で、十分な検証を経ぬままに、憶測に基づく評価や誤った解釈も生じてしまっております。そこで、遠藤隆吉研究所では、豊富な史資料・著作に依拠しつつ、思想史・歴史学的方法論に基づき、客観的かつ実証的に遠藤の業績を再評価してまいりたいと思います。また、遠藤は著書以外にも、多くの論考・講演録を公にしております。それらの情報を遺漏なく集めて著作総合目録を作るとともに、一部については復刻復刊や未翻刻資料の資料化も手がけてまいります。

こうした計画のもと、2023年度は本館 6-2会議室に掲出されている「家学の書」と



朽木 量
遠藤隆吉研究所 所長
総合政策学部教授

呼称されている墨蹟の翻刻と調査を行い、遠藤隆吉研究所資料調査報告第1号として刊行いたしました。2024年度は同じく書き下しや現代語訳のない「津田沼境域記」碑の翻刻と、修練道場「生々示字」および「生々示」碑の研究にあたるべく調査を展開しています。津田沼にあった修練道場「生々示字」については、遠藤隆吉先生と千葉を結びつける切欠となった場所であり、生々主義哲学の基礎となる場所でもあります。遠藤隆吉研究所では、「生々示字」関連の資料の収集を行うとともに、実叻小倉公園に現存する「津田沼境域記」碑の翻刻・書き下し・現代語訳に取り組んでいます。研究の現状としては白文の碑文に返り点などを打って翻刻し、書き下し、現代語訳まで終了しています。今後は、碑面の拓本を採るべく、習志野市教育委員会に許可のための働きかけを行っているところで。また、「生々示字」の建物自体は東京の新井薬師において本堂として移築されて現存しています。資料調査報告の刊行に向けて、この調査についても並行して行っていく予定です。

この編纂日よりでは、記念誌編纂事業とも連携しつつ、遠藤隆吉研究所の研究現場の様子を定期的に報告していきたいと考えています。つきましては、読者諸氏のご指導ご鞭撻と、情報提供をお願い申し上げます。次第です。どうぞ宜しくお願いいたします。

◀「津田沼境域記」碑

加藤寛学長が本学を実験場としてやろうとした「教育改革」

1995年10月28日号の週刊ダイヤモンド誌は「『超成長』大学の秘密」という特集を組んだ。表紙には4月に千葉商科大学の学長に就任したばかりの加藤寛が登場している。そのいでたちは、ワイシャツ姿で黄色いヘルメットをかぶり、そのヘルメットには「改革」の文字が見える。組んだ腕には「千葉商科大学」の腕章をはめている。

タイトルは、当時、人気絶頂だった慶應義塾大学・湘南藤沢キャンパス(SFC)をターゲットにしたもので、加藤はその「顔」として特集に登場しているのだが、インタビューでは「なぜ、千葉商科大学の学長を引き受けたのか」という点に焦点が当てられている。

加藤は、多摩大学などいくつかの大学から誘いがあったが、多摩大学はすでに改革を実現して行ってもやることがない。「千葉商科大学はとにかく改革をしたいと言っている、やることはたくさんあるだろう、ということでここに決めたのだ」と語っている。さらに、「千葉商科大学の改革が成功すれば全国の大学が真似をするはずだ」ともしている。SFCのような基礎的な学力が高い学生が集まる場所だから改革が成功したのではないか、という問いに抗うかのように、大学教育改革を千葉商科大学で実践していく意欲を示していた。だが、落下傘でいきなり学長になった加藤に、千葉商科大学の教員たちの態度は冷たかった。

「表紙の写真をよく見ると、加藤先生の顔が歪んでいるでしょう。これは顔面神経麻痺になっていたのです」と、加藤の秘書役だった露崎洋(現・事務局長)は証言する。改革に抵抗する教授らに会議で長時間「吊し上げられ」、過度のストレスで顔が歪んでいたというのだ。

加藤は何をやろうとしていたのか。加藤が1996年に書いた『教育改革論』(丸善ライブラリー)にはこんなくだりがある。

「往々にして、大学の特殊性として、その意思決定の機関が教授会であることが挙げられる。しかし教授会は経営者でも設置者を代表するものでもなく、また大学経営の主体でもない。教授会は、設置者によって雇用される被雇用者の集会であるから、いわば労働組合に類比すべき意識が先行し、利益集団として自己弁護を行うことになる。ここから、経営的に新しい方向が出てくることを期待するのは、間違っていると考えべきである。しかも大多数の大学では、教授会が大学の代表者たる学長を選出する。これは、

組合の委員長に社長の役割を期待するようなものであると言わなければならない」

旧来型の教授会に喧嘩を売っているようなもので、教授会が紛糾するのも当然といえば当然だったのだろう。ちなみに、教授会のあり方は2014年の私学法改正で大きく変わったので、加藤の考えは時代を先取りしていたと見ることもできる。

大学教育については「現実に大学で教えられている科学は総合化されていない」と指摘し、以下のように述べている。

「(現代社会の)複合的システムを私たちは細分化された単一科学の研究によって実践的に処理することができるのであろうか。遠藤隆吉先生は、専門科学の上に立つ総合的視点を強調されていた。専門学者になるのではない多くの学生にとって実社会で科学的判断の力になる実学は、まさに、企業行動の総合的判断でなければならない。

ダイヤモンドの特集のインタビューでも、千葉商科大学では、補習コースのような形で、「情報処理と英語、そして簿記会計」を学ばせるとしている。科学の総合化に取り組むベースとしてこの3つを身に付けることが重要だという加藤の考えは、千葉商科大学の「3言語」として今も生き続けている。(磯山 友幸)



編集後記

このたび、千葉商科大学記念誌編集だより「パンタライ」vol.01を刊行いたしました。創刊にあたって理事長・学長・同窓会長から一文が寄せられており、本学創立100周年記念事業への気運の高まりを感じていただけるかと思います。また、「資料紹介」「遠藤隆吉研究所から」「コラム」では、記念誌分科会においてすでにいくつかの調査研究成果をあげていることをご報告しています。今後も資料収集など活動を広げてまいりますので、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(統括学長補佐 磯山友幸)

記念誌分科会 活動記録 (2023年12月～2025年3月)

2023年	11月	記念誌分科会設置
	12月	第1回記念誌分科会
2024年	2月	第2回記念誌分科会
	3月	「全国大学史資料協議会」部会研究会一般参加
	4月	第3回記念誌分科会
	8月	学内資料収蔵状況確認
	9月	史料編纂室リニューアル(図書館開設)
		史料収集開始
		第4回記念誌分科会
	11月	第5回記念誌分科会
	12月	第6回記念誌分科会
2025年		史料編纂室保管資料デジタル化開始
	3月	第7回記念誌分科会
		資料寄贈受入れ開始

資料寄贈のお願い

本学の100年の歩みを振り返る上で、卒業生の皆様がお持ちの資料は重要な記録・手がかりとなります。お持ちの資料をご寄贈いただける方は、下記の申込み・問合せ先までご連絡ください。

【情報・資料などの例】

卒業証書、入学手続きの記録、大学から送られた書類、大学で使用した教科書やノート、日記、写真、研修旅行・ゼミナール合宿の記録、学生寮関係資料、部活動・サークル活動関係資料など

*原本を寄贈ください。原則として返却はできません。

【申込み・問合せ先】

右の「お問い合わせフォーム」よりお問い合わせください。

*お問い合わせの際は、資料の内容(名称・分量等)をお知らせください。

*内容を確認の上、係よりご寄贈方法などについてご相談させていただきます。

(保管スペースの都合上、資料の受入れをお断りする場合もございます。ご了承ください。)

お問い合わせフォーム



スマートフォン用
二次元コード



PC用
二次元コード

千葉商科大学記念誌編集だより 創刊号



【Πάντα ρεῖ(パンタライ)の由来について】

古代ギリシャ語の「Πάντα ρεῖ(パンタライ)」は、ヘラクレイトスの言葉「万物は流転する」であり、生々示碑の最上部に掲げられている。「第一に万物は生々流転するがゆえに測り知ることは出来ないため万物を畏敬するべきであること、第二に人間も同様に測り知ることは出来ないで平等に扱うべきこと、第三に人間は生々発展することを希望しているのでそれを助けるべきこと」の三つを綱領とした遠藤隆吉の生々主義哲学を象徴する言葉である。編集だよりの表面に記されたこの文字は、生々示碑から拓本により写し取った遠藤自筆の文字である。

発行日：2025年4月1日

編集：千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会 記念誌分科会

印刷：(株)アド・プラネット

発行：学校法人千葉学園 千葉商科大学
総務課史料編纂係

〒272-8512 千葉県市川市国府台 1-3-1

TEL：047-373-9774 (平日 9:00-17:00)

創立100周年特設Webサイト URL：https://www.cuc.ac.jp/100th/



記念誌編纂に向けた活動

「生々示」碑の拓本採取風景(2025年2月 朽木教授)

記念誌分科会の活動の一環として、大学キャンパス内に設置されている「生々示」碑の拓本を採取しました。創設者遠藤隆吉が自ら記した古代ギリシャ語の「Πάντα ρεῖ(パンタライ)」の文字を写し取ることができ、これを本『記念誌編集だより』のタイトルとしました。